西東京市郷土資料室　企画展示

渋沢栄一が生きた時代 ―田無・保谷の歴史のあゆみ―

～展示概要編～

■武州世直し一揆

〔世直しに立ち上がった農民一揆〕～慶応２（1866）年６月 16 日～

武州世直し一揆（ぶしゅう よなおしいっき）

【武州世直し一揆とは】

武州世直し一揆は、慶応２（1866）年６月 13 日から 19 日までの１週間にわたり、武州 15 郡・上州２郡の広域に延べ 10 数万人の農民が参加し豪商農、組合役人、村役人ら家数 520 軒以上を破壊した大規模な農民闘争のことです。

江戸時代中期以降、それまでにも一揆や「打ちこわし」は起こっていたが、この一揆がそれらと異なる点は、世直し・世均し〔(よならし）富の偏りをならし、平均化すること〕といった経済的要求をかかげたことにあります。

背景には、横浜開港以来の物価の高騰による富の偏りがありました。

【打ちこわし（ぶっこわし）が起きる】

世直し一揆は、慶応２年６月 13 日、幕府領・秩父郡上名栗村から発生しました。

大工・豊五郎と桶職人の紋次郎は、13 日夜、飯能河原へ集結するように声高に村内に触れ回った。

そして、翌 14 日の早朝、多摩郡下成木村（青梅市）の組頭・喜左衛門および二又尾村（青梅市）の百姓・槇次郎らと合流して飯能に集結しました。

名栗村からの参加者は 200 人でしたが、飯能河原では 2000 人に膨れあがりました。勢揃いした一揆勢は「世直し」だととなえて蜂起し、これがきっかけとなって、武州 15 郡・上州２郡に波及する一大百姓一揆に発展しました。

秩父地域に発生した一揆は、開港以来の物価の高騰などに苦しむ貧農層が中心となったもので、質屋の抵当となっていた土地の無償返還、物

価の引き下げなどを要求して、これに応じない商人、質屋、豪農の居宅を打ち壊しました。

一揆は、『世直し一揆展開図』にみるように、またたく間に一帯をなめつくし、地域の貧農層を巻き込みながら、所沢からさらに南下して、田無を襲撃する気配を見せました。

【田無農兵隊による鎮圧と一揆の崩壊】

一揆勢のうち、所沢から柳窪新田（やなぎくぼしんでん）（東久留米市）に進んだ一群は、江川太郎左衛門の代官所派遣の鉄砲教示方（てっぽうきょうじかた）が率いる田無農兵隊によって鎮圧されました。

教示方の報告には、「一揆勢は私の支配所へいよいよ乱入しようとし、幾手にも分かれて押し込んできた。田無へ向けてやってきた一団はおよそ500人ほどで、16日の朝に隣村の柳窪村の人家を打ちこわしたところを、鉄砲教示方の者が田無農兵隊を引き連れ、説諭に当たった。

しかし、これを聞き入れずに手向かったため、余儀なく発砲し、8人を撃ち倒し、8人を召し捕った。その後、5人を差し押さえた」と書き残されています。

柳窪村の届書によれば、「所沢村を打ちこわした一揆勢の一群が、この日（16日）、数百人押し寄せ、名主宅（村野家）を打ちこわし、次いで百姓七次郎の居宅と土蔵を打ちこわしている最中に農兵隊が屋敷裏から討ち入り、一揆勢はちりぢりになって逃走した」という。

打ちこわし勢は、結局6月19日には壊滅し、一部の指導者を除いて、召し取られた参加者の多くは過料銭（罰金）という罰のみで許され、村に戻りました。

打ちこわし勢が豪商農に承諾させた約束事はすべて破棄され、一揆は終息しました。

歴史ジオラマ 10「田無農兵隊の出動」(武州世直し一揆）